神秘的に／力強く／美しく

やん衆どすこほい祭り

38,000人の歓声が春風を呼んだ

3月6・7日に行われたやん衆どすこほい祭り。今回は第10回目を迎え、多彩なイベントが繰り広げられました。

特に最終日のやん衆ばんばレースでは、市内外から多くの人たちが集まり、つぎつぎと競い合うレース展開に観衆は歓声をあげていた。

この日は日焼けするぐらいの快晴に恵まれ、空にはアドバルーンや凧が舞い上がり、さらには100以上の大漁旗が青空を染めた。会場では大浜なべ、寿司、管内からの地場産品などが販売され、各テナントには長い行列が出来、帰るのを忘れさせてくれました。

風のみえるまち るもいの春は やん衆が過ぎてやってくる

鉄道開通前の交通路

福士広志
海のふるさと館学芸係長

留萌と内陸部を結ぶ鉄道は、明治二十九年北海道鉄道敷設法ができ、その予定路線の中に雨竜原野から増毛に至る路線があった。しかし、遅々として内陸部の開拓が進行しない状況があったため、一時第一期予定路線からはずされていた。留萌の運動が効をそうしたのか明治三十八年の第二十二帝国議会でこの予定路線の内深川～留萌間が第一期に編入され、明治四十年二月に着工し、丸四年の歳月をかけて明治四十三年十一月完成した。

それまでの深川～留萌間の交通手段の不便さを物語る一節がある。「留萌線建設概要」によると「深川留萌の間の交通は船の便もなく、ただ一本の道路しかなく、鉄道建設に必要な資材の運搬はこれにたよるしかなかった。冬は積雪を利用して馬橇による運搬方法があったが、積雪は二メートル～三メートルにもおよび、吹雪になれば道路は使えず、数日間交通が途絶えることがしばしばあった。また、この時期は林業の木材運搬の季節にあたり、馬橇の数がたりないため、馬橇運搬の運送費が高くつくことがしばしばであった。それにくわえ、建設資材の内レンガ、セメント、金物、木材はいうにおよばず、石材、砂利、砂等はほとんど深川、留萌から運搬しなければならなかった。それで、これらの建築資材の運搬方法についてはきっちりと計画を立てて、工程に応じて馬橇や馬車を利用し、また、できあがった鉄道路線を利用して運搬にあたった。」

建設資材の馬橇による運搬

このように留萌線の建設資材の運搬には運搬手段が限られていたために資材運搬に苦労したことが書かれている。これを見ても当時この沿線に植民した人たちがどのような状態にあったかを知ることができる。

また、明治三十九年には幌糠に郵便局が開設されているが「幌糠郵便局通信事務概要」によると「郵便物は妹背牛から北竜、沼田、峠下を経て留萌に至る道路を以て運搬されていたが、例年春先の融雪期には留萌川が氾濫し、道路は泥土と化し人馬の交通は甚だ困難を極めた。交通の最も不便なる地である。郵便集配人は常時熊除けラッパをならしながら集配業務をおこなった。」とある。いかに内陸の交通網が未熟であったかがわかる。